

日病薬誌, 平成11年5月1日発行(毎月1回1日発行), 昭和47年1月27日第三種郵便物認可, VOL.35, NO.5 ISSN 1341-8815
CODEN: NBYZEB

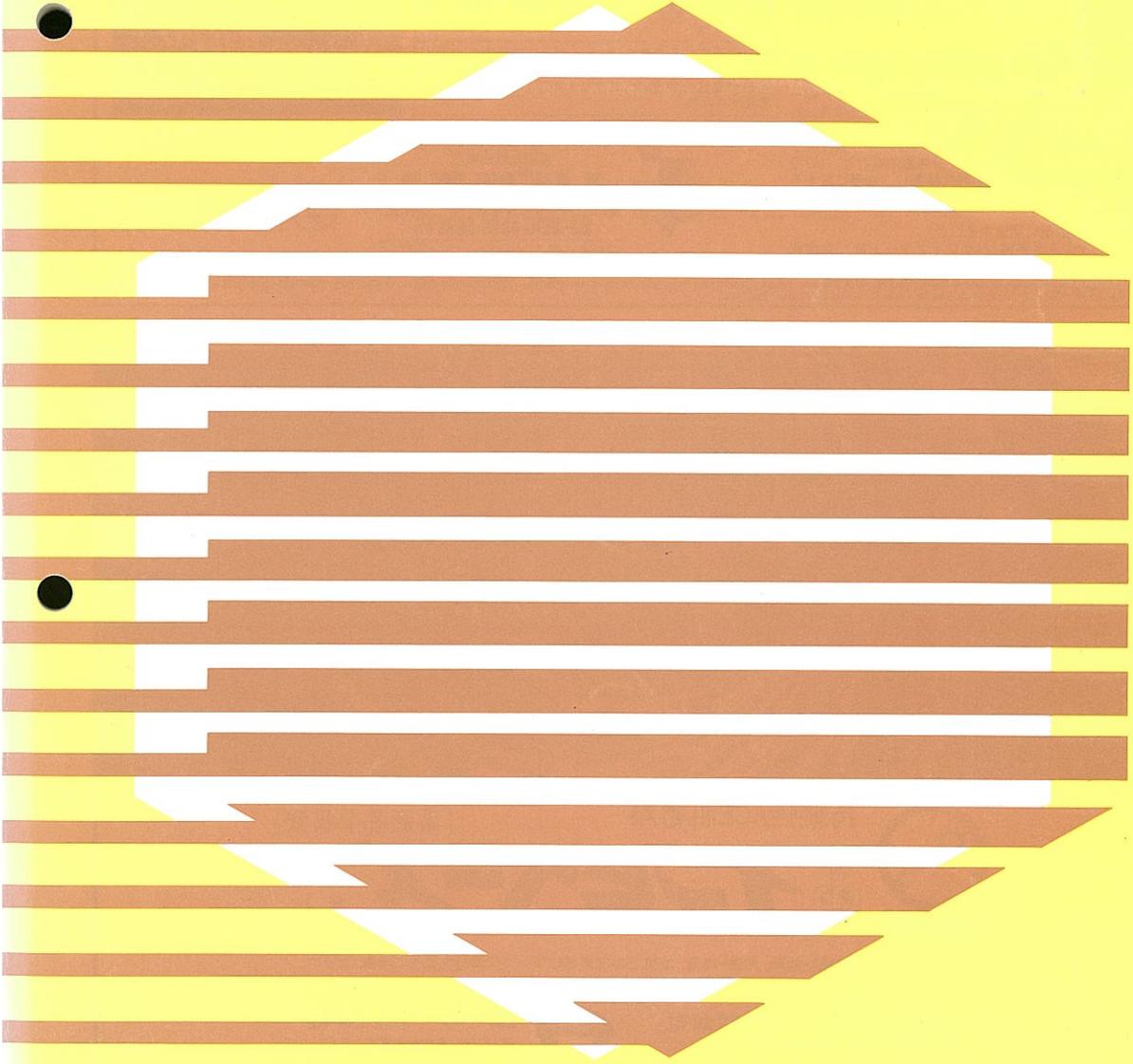
日本病院薬剤師会雑誌

JOURNAL OF JAPANESE SOCIETY OF HOSPITAL
PHARMACISTS

VOL.35 NO.5 1999



5



日本病院薬剤師会

病院薬剤師のための漢方製剤の知識

三黄瀉心湯①処方解説

北里研究所東洋医学総合研究所
漢方診療部医長 渡辺賢治

瀉心湯と名の付く処方には三黄瀉心湯の他に半夏瀉心湯、甘草瀉心湯、生姜瀉心湯、附子瀉心湯などがある。瀉心とは心の苦痛を除く意味であり、心の意味には二つある。一つは形態としての心、瀉心湯類の目標となる心下痞というのは心臓の位置している近傍、すなわち心下部のみぞおちあたりの痞えた感じを指す。もう一つは機能の上での心、つまりところを指し、瀉心湯のもう一つの目標である心気不足というのは不安、不眠など一連の精神状態を指している。瀉心湯の処方がすべてオウレン(黄連)、オウゴン(黄芩)の苦い味を持ったものが主とならているのは、五行説では苦い味は心を養うことより来ている。三黄瀉心湯は非常にシンプルな処方である。ただ漢方ではシンプルな薬ほど効き味が鋭いと言われている。日常診療でもここぞという時に威力を発揮するので、ぜひ試してみたい薬の一つである。ただしこれから述べるように、三黄瀉心湯はいろいろ議論の多い処方である。その事も含めて述べる。

原典は『傷寒論』、『金匱要略』である。『傷寒論』では大黃黄連瀉心湯という名で出てくる。条文は「太陽病、醫汗を發し、遂に發熱惡寒し、因って復た之を下し、心下痞し、之を按じて瀉、その脈浮の者は大黃黄連瀉心湯之を主る」。ここで「心下痞」という言葉が出てきた。これはみぞおちあたりの痞えた感じを指す。その次に「之を按じて瀉」という言葉が出てきた。日本漢方と中国漢方の違いは腹診にあるとよく言われている。日本漢方でいつから腹診が始まったかということに関しては大塚敬節先生に『腹診考』という論文があり、それに詳しく述べられている。ただ『傷寒論』の後漢の時代、すでに中国では腹診を行っていたことが「之を按じて瀉」という文章から読みとれる。その後中国では儒教の影響で腹診が廃れてしまっ

たようである。

次に『金匱要略』の条文であるが、「心気不足、吐血衄血するは瀉心湯之を主る」とある。ここに「心気不足」という言葉が出てきた。また『金匱要略』では瀉心湯という名前が出てくる。このように名前も異なり、また飲み方も『傷寒論』では沸騰した湯にしばらく生薬を浸して、滓を除いて頓服するという振り出し法が指示されているが、『金匱要略』では普通の煎じ方になっている。さらに複雑なことは、『傷寒論』では大元の原本が残っていないためにいくつかの異本があるが、朱本、成本などではこの大黃黄連瀉心湯というのは大黃、黄連二味から構成されていて、黄芩が抜けている。しかし瀉心湯類を一覧してみると、黄連、黄芩が含まれていることが特徴であり、多くの解説書が『傷寒論』の大黃黄連瀉心湯と『金匱要略』の瀉心湯は煎じ方が違うにしても処方内容は同じであると考えている。

三黄瀉心湯はその俗称である。三つの黄のつく生薬、すなわち大黃、黄連、黄芩から成ることである。オウレンはベルペリンが主であるが、消炎作用を有する苦味健胃薬で、血圧降下作用、鎮静作用、高コレステロール改善作用などがある。オウゴンはバイカリンなどのフラボン誘導体が主成分で解熱作用を持つ。ダイオウはセンノシドに瀉下作用があることはよく知られているが、アントラキノン類には消炎作用があり、またRGタンニンは抗精神作用を有する。

煎じ方であるが、いわゆる振り出し法にする場合は熱湯100mLを加え、1~3分ほど浸してから、滓を去って頓服する。今でも普通に煎じる場合と振り出しにする場合と二通りある。

次に主要目標について述べる。

①先ず顔面が赤ら顔であること。これはポーッと

〔提供〕株式会社ツムラ

病院薬剤師のための漢方製剤の知識

した桜色ということではなくて、はっきりした赤ら顔を指す。ポーッと桜色といえは蒼桂味甘湯などケイシ(桂枝)の入った処方などを考える。黄連解毒湯などのオウレンの入った処方、どちらかと言えば黒みを帯びたはっきりとした赤い顔が目標となる。

②気分がイライラして落ち着きがない、短気である。或いは小さいことに固執する、或いは大言壮語して言動に確実性がないなどが目標になる。

③胸中に熱感を訴える、これは時として胸焼けとして現れることがある。それが上に出てくると口内炎となり、或いは動悸となって時に胸痛になることもある。

④出血。この出血というのは鮮血が出て貧血がないことが目標である。出血していても手足の冷たい感じはなく、むしろ煩熱を覚えることがある。

⑤時に不眠、頭重、めまい、肩凝りがある。これらはないことも多いが、問診では必ず聞く必要がある。

⑥便秘。便秘の傾向の人は多く、また1日1回あったと言っても便通がうまく出ないとか、量が少ないということを使う。もし三黄瀉心湯を用いて下痢がひどく出るようであれば、これは三黄瀉心湯の証ではない。

⑦心下痞を認める。これはみぞおちの痞え感である。これが半夏瀉心湯になると心下痞硬と言ひ、自覚的痞え感だけでなく腹診上でも抵抗を認める。

こうしたことを目標として次のような疾患に応用される。

①まず炎症性疾患に対し消炎効果を期待して、結膜炎、虹彩炎など眼科領域の炎症、口内炎、舌炎など。

②鎮静作用を期待して、精神分裂病、躁鬱病、神経症など。また不眠、不安焦燥感、さらに高血圧、脳出血などにもしばしば応用される。

③止血作用と期待して、衄血、下血、咯血、吐血、また子宮出血などにも使われることがある。こうした場合には固まった血ではなく鮮血が出ることを目標にする。また貧血症状が強くなることなく、あまり虚していないことが目標になる。特に衄血である鼻出血に対してはよく用いられ、即効性があるのでぜひ試していただきたい。このような出血性の疾患に用いる場合には熱を冷ます意味も含めて、冷たく飲む冷服を指示する。そうすると止血効果も高まる。

④健胃整腸作用を期待して、常習便秘とか二日酔いなどにも用いる。二日酔いに対しては黄連解毒湯がよく使われるが、三黄瀉心湯も便秘傾向がある場合には二日酔いによく効くので試していただきたい。以上三黄瀉心湯の処方解説を述べた。

（日本短波放送 2月17日）
このように三黄瀉心湯は非常に単純な構成であるが、応用範囲が非常に広く日常診療でもいろいろな局面で用いる場面が多い処方であり、ぜひ試していただきたい。

【提供】株式会社ツムラ